# 角幡 唯介著 「そこにある山」 ―結婚と冒険について

本書は月刊誌「中央公論」に「冒険の断章」という題名で連載（2018・9～2019・4 及び 2019・9～2020・8）されたものを 1 冊に纏めたものだ。著者も気がつけばはや 43 歳、植村直己がデナリで消息を絶った歳と同じ年齢となっており、もう今までのような無茶は出来なくなった。結婚し子供も生まれ、長期ローンを組んでマイホームも得た今、この先どう家庭と探検とを両立させていくか、探検家の悩みは深く、本書でそのジレンマについてポール・ツヴァイクやハイデガー、オデッセイヤまで駆り出して、蘊蓄傾け己の心理を分析、現状を見つめ直し論理的に弁明に努めているが、読者は戸惑うばかりだ。

世界最大というチベット・ツァンボ峡谷に単独で挑み地球の空白部分を明らかにしたその探検記「空白の 5 マイル」集英社（2010 年刊）を読んだ時、私は地球上にまだこんな所が残っていたのかと素直に驚き、その偉業に手放しで脱帽したものだった。

その後 2013 年には「アグルーカの行方」集英社を刊行。この 19 世紀中頃北極海で行方不明となった英国の探検家フランクリン隊の足跡を辿った記録もハラハラドキドキの連続で日本を代表する若手冒険家の出現に盛大な拍手を送ったものだ。

彼が凄いのは、やってやるぞというその強い意志・体力と共に全て自費で賄いスポンサーを付けない事だ。植村直己は多くのスポンサーや応援者の期待という重圧に押しつぶされ無理を重ねてしまったように思うし、2 年前エベレストで亡くなり「無謀な挑戦」と批判された栗城史多も取り巻きに追い込まれ焦った末の遭難だった。

そういう観点からもスポンサーの付いた雪男探索隊に参加した「雪男は向こうからやってきた」集英社（2011 年）は頂けなかった。この思わせぶりな題名に騙されて、こんなしょうもない事よくまあ長々と書けるもんだと腹が立ったが、途中で投げ出させずに最後まで読ませてしまうその筆力こそが著者の大きな武器であり、上手い文章には感心した。

大手新聞社に勤め新聞記者として読者を惹きつける文章の術に長けており、出版した本の印税が主な収入源というわけで、見過ぎ世過ぎの為に内輪な事を書いたというのが本書であり、「探検家がどうして結婚したのか」との問いに反発し、いろいろ小難しい事をもっともらしく述べているが、ついていくのがしんどくて、途中はもう斜め読みになった。

こちらが期待しているのは未知の地への冒険談や探検談であり、今更結婚観や人生訓でもあるまい、ネタが尽きて、こんなことでも書くしかないのかと同情してしまったが、体力的に下り坂の探検家にとってこれからどうするかが大きな問題であるのは間違いない。

今の世に世間があっと驚くような探検や冒険の余地はなく（チベットの聖山カイラス登頂を狙えば皆驚くだろうが、無事では済むまい）、命を賭す冒険には見切りをつけて、余計なお世話だが、かっての事件記者の経験を活かし「しんがり」や「石つぶて」で注目された清武英利氏や「疵」や「不当逮捕」の本田靖春氏のようなノンフィクションライターへの転進など如何なものか。2 人とも元新聞記者であり、彼の優れた取材力と筆力を生かすにはそれが一番だと思うのだが。

（2020・10 中央公論社・1400 円）　　（AKA）